

校長先生の初恋物語

第33話 さらばガブ さらばアマーラさん

イノシシが学校に来たことが大問題になりました。子供たちを安心して登下校させられないと、親がこうたいで、登下校の見守りをするようになりました。ガブは、そんなイノシシ問題にまきこまれたんです。ガブは、助けようとしたんです。アマーラさんを。1年生を。きんに君を。でも、アマーラさんがくる前は、イノシシと同じように、子供たちを追っかけまわすやっかいものの野良犬でした。そのガブが、これから先、子供たちをおそう可能性だってゼロじゃないって町のみんなが言い出して、ガブは、つかまってしまいました。

ガブがつかまったのは、こづつみ山公園です。アマーラさんはいっしょうけんめい止めたそうです。「もう、危なくないから。」と、何度もお願いしたそうです。でも、ガブはつかまってしまい、小さいオリの中に閉じ込められ、マンモス小学校のすぐとなりにあった町役場の駐車場に数日いました。アマーラさんは、そこに行って、給食ののこりを与えていましたが、数日後、ガブはそこからもうなくなりました。本当になんともいわれていた。

わかれは、それだけで終わりませんでした。学校に、アマーラさんは来ませんでした。そして、iyorihige先生が教室に来て、みんなに言ったのは、しょうげきでした。

「とっても急ですが、アマーラさんがお父さんの仕事のつごうで、転校することになりました。」みんな、声も出ませんでした。

その日の夕方、こづつみ山公園の近くにある、アマーラさんが住んでいたアパートに行ってみました。表札の「木村」という名前は消されていました。カーテンもはずしてありました。お別れも言わず、アマーラさんは突然行ってしまいました。



そのあと、こづつみ山公園に行きました。ガブのあじとに行きました。なんとなく、ほらあなの中に、アマーラさんと、ガブがいるような気がしたからです。いるといいなあと思っていました。

ほらあなの前で、「アマーラさーん。ガブーー。」と声を出してみました。でも、返事はなく、帰ってきたのは、ほらあなの中からはんしゃしてくる自分の声だけでした。「あーあ。もっとアマーラさんと、いっしょにいたかったなあ。」アマーラさんに対する気持ちにも気がつきました。

「ぼくは、アマーラさんのことが、大好きだったんだなあ。」

とっくんの初恋は、もはやどれが一番なのかよく分からなくなっていました。よしこさんが好きなのか、ダンプさんが好きなのか、それともアマーラさんなのか。まちがいなく言えるのは、よしこさんやダンプさんに負けないくらい、アマーラさんのことも大好きだということです。

「さよなら。アマーラさん。さよなら。ガブ。」

ほらあなの中に向かって、とっくんは言いました。

アマーラさん、今、どこにいるかなあ。ガブといっしょに楽しく暮らしているといいなあ。



次回、5年2組のiyorihige先生のなぞにせまります。あごのほくろからはえているめちゃくちゃ長くて気持ち悪い1本の毛。どうしてそんな気持ち悪い毛を、iyorihige先生がはやしているのかが明らかになっていきます。

次回予告 iyorihige先生の iyorihige物語

